

正課外活動による社会貢献性の傾向

—山口大学おもしろプロジェクト企画のSDGs（持続可能な開発目標）による分類をもとに—

辻 多 聞

要旨

正課外活動である山口大学おもしろプロジェクトにおいて2007年度から2018年度に採択された企画をSDGs（持続可能な開発目標）の17目標に対する分類を行った。その結果、SDGsの目標における「教育」、「実施手段」、「都市」が多く、正課外活動はこの3者の観点で社会貢献性が強いことがわかった。また「保健」や「イノベーション」も多くなる傾向にあった。この2者が多くなったことから学生による正課外活動の着想、実行は、自身の所属学部の専門性に大きく依存することが示唆された。学生の自由な発想に基づく正課外活動には社会貢献性があると言えるが、同時に社会貢献に関する分類において大きな偏りが生じることも明らかとなった。

キーワード

正課外活動，社会貢献，山口大学おもしろプロジェクト，SDGs（持続可能な開発目標）

1 はじめに

1.1 研究の背景

近年の大学教育においては、正課教育はもちろんのこと正課外活動による教育も非常に重要視されている。文部科学省「学生支援の在り方に関する論点整理（案）」（2009）に、「…豊かな人格形成に資する正課外活動を積極的に正課に取り入れる方策を検討…」とある。正課だけでは十分に培えない人格形成、すなわちキャリア形成を正課外活動によって補おうということである。辻（2019）は、大学生には十分に正課外活動を行う時間があり、大学は学生のような支援体制を整えるべきだと述べている。正課外活動によるキャリア形成の研究は盛んであり、溝上（2009）は、授業外活動が学生の成長に関係していることを示唆している。また辻（2009）は、山口大学の正課外活動である「山口大学おもしろプロジェクト（学生の企画に対する資金支

援を行う制度、後述参照）」は人格的成熟などの高度な学びを参加学生にもたらしたであろうことを示している。さらに辻（2012）は、「山口大学おもしろプロジェクト」の参加学生は「コミュニケーション力」、「実行力」のキャリア要素の成長を自覚できるであろうことを示している。このように正課外活動によるキャリア形成が注目されてきたことに加えて、直近では「一人一人がより豊かな人生を送ることのできる持続可能な社会づくりを進めるためには、行政のみならず企業や大学、団体、個人など様々な主体がそれぞれの立場から主体的に取り組むことが必要となる」

（文部科学省，2018a）と示されるように大学における社会教育に対して、地域づくりへの貢献が期待されている。社会教育は、社会教育法第二条において「学校の教育課程として行われる教育活動を除き、主として青少年及び成人に対して行われる組織的な教育活動（体育及びレクリエーションの活動を含む）

をいう」と定義されている。これは大学教育において社会教育は正課外活動の一部を指していることになる。すなわち、近年では大学の正課外活動に対して、学生のキャリア形成だけでなく、地域づくりをはじめとする社会貢献性が期待されている、ということである。

1.2 山口大学おもしろプロジェクト

「山口大学おもしろプロジェクト」（以下、おもしろプロジェクト）とは、1996年度より始まった学生の自主的・創造的企画に資金援助する学生支援プログラムであり、山口大学を代表する正課外活動の一つである。「カタチにしたい」と思う企画（プロジェクト）を年度始めに学生自らが申請し、学内教職員による選考委員が可否選考を行って、採択となった場合は1年間の活動実施資金として最大50万円の予算枠が学生に提供される。各企画に対して支援教員を配置することを義務付けてはいるが、支援教員は相談役に過ぎず、プロジェクトの企画、立案および運営など、すべてを学生が自主的に行わなければならない。申請する企画内容に関しては、卒業研究をはじめとする正課と関連しないものであれば基本的には制限がない。活動期間や支援金が十分にあるとともに、発案や実施も教員が携わらない学生のみという、活動しやすく極めて純粋な正課外活動と言える。

1.3 SDGs (Sustainable Development Goals)

SDGs (Sustainable Development Goals) は「持続可能な開発目標」と訳されており、外務省のホームページにおいて、

2001年に策定されたミレニアム開発目標 (MDGs) の後継として、2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」にて記載された2016年から2030年までの国際目標です。持続可能な世界を実現するための17のゴール・169のターゲットから構成され、地球上の誰一人として取り残さない (leave no one behind) こと

を誓っています。SDGsは発展途上国のみならず、先進国自身が取り組むユニバーサル (普遍的) なものであり、日本としても積極的に取り組んでいます。

と紹介されている。SDGsの前身であるMDGsでは途上国の開発が対象であったのに対し、SDGsでは先進国も含めた全ての国を対象としている。これに伴い、目標 (ゴール) 数はMDGsの8から17へと増加し、包括的なものとなっている。また、MDGsは国連や各国政府など開発を専門とする機関の目標であったのに対し、SDGsでは全ての国、人々の目標となったことから、企業や団体などにも積極的な関わりを呼びかけるものとなっている。すでに多くの取り組みがなされており、外務省のホームページには、企業関連の事例をはじめとして多くの事例が紹介されている。SDGsに掲げられた17の目標を表1に示す。

1.4 研究の目的

大学生の正課外活動による社会貢献性が期待されている一方で、どのような形で正課外活動が社会貢献につながるか、すなわち正課外活動による社会貢献的分類の傾向に関する報告は、あまり見られない。ところで、大学生の場合、正課外活動は非常に広い範囲の活動を意味することとなる。というのも、大学には例えば高等学校でのホームルーム活動や生徒会活動といった正課外活動をまとめた学習指導要領がないからである (文部科学省, 2018b)。すなわち、大学生の正課外活動は「単位履修を伴う講義や演習など以外」の全般を指すこととなる。本文では単位履修を伴わない活動で、学生発案、学生実施の学生の主体的活動を正課外活動と表現することとする。また本文での正課外活動には、いわゆる野球部や吹奏楽部などといった既存の体育系および文化系のサークル活動は含まないものとする。本研究は、極めて純粋な正課外活動であるおもしろプロジェクトの企画内容を、

表1 SDGs（持続可能な開発目標）の一覧

番号	タイトル※1	スローガン	目標※2
1	貧困	貧困をなくそう	あらゆる場所で、あらゆる形態の貧困に終止符を打つ
2	飢餓	飢餓をゼロに	飢餓をゼロに
3	保健	すべての人に健康と福祉を	あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を推進する
4	教育	質の高い教育をみんなに	すべての人々に包摂的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する
5	ジェンダー	ジェンダー平等を実現しよう	ジェンダーの平等を達成し、すべての女性と女児のエンパワーメントを図る
6	水・衛生	安全な水とトイレを世界中に	すべての人々に水と衛生へのアクセスを確保する
7	エネルギー	エネルギーをみんなに そしてクリーンに	手ごろで信頼でき、持続可能かつ近代的なエネルギーへのアクセスを確保する
8	成長・雇用	働きがいも経済成長も	すべての人々のための包摂的かつ持続可能な経済成長、雇用およびディーセント・ワークを推進する
9	イノベーション	産業と技術革新の基盤をつくろう	レジリエントなインフラを整備し、持続可能な産業化を推進するとともに、イノベーションの拡大を図る
10	不平等	人や国の不平等をなくそう	国内および国家間の不平等を是正する
11	都市	住み続けられるまちづくりを	都市を包摂的、安全、レジリエントかつ持続可能にする
12	生産・消費	つくる責任 つかう責任	持続可能な消費と生産のパターンを確保する
13	気候変動	気候変動に具体的な対策を	気候変動とその影響に立ち向かうため、緊急対策を取る
14	海洋資源	海の豊かさを守ろう	海洋と海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する
15	陸上資源	陸の豊かさを守ろう	森林の持続可能な管理、砂漠化への対処、土地劣化の阻止および逆転、ならびに生物多様性損失の阻止を図る
16	平和	平和と公正をすべての人に	公正、平和かつ包摂的な社会を推進する
17	実施手段	パートナーシップで目標を達成しよう	持続可能な開発に向けてグローバル・パートナーシップを活性化する

※1：外務省（2019）より引用， ※2：国連広報センターホームページより引用

社会貢献の国際的指標であるSDGsの目標で分類することで、正課外活動による社会貢献性の傾向を明らかにすることを目的とする。

2 研究方法

2.1 おもしろプロジェクトの分類対象期間

上記のようにおもしろプロジェクトは1996年度より開始されている。当然のように開始当初にはSDGsはおろかMDGsすらなかった。また、おもしろプロジェクトの申請において学生はSDGsの目標を意識する必要はまったくない。すなわち申請した学生が、自身たちの企画に対してSDGsの目標番号を付しているわけではない。筆者は2007年度より業務としておもしろプロジェクトと深く関わり、実施している学生ともよくコミュニケーションをとって、各企画内容を理解している。よって、

2007年度から2019年度までのおもしろプロジェクトの企画内容をSDGsに基づいて分類する対象とした。対象としたおもしろプロジェクトの企画数は表2のとおりである。

表2 2007～2018年度におけるおもしろプロジェクトの企画数

年度	企画数	年度	企画数
2007	10	2014	13
2008	12	2015	10
2009	10	2016	7
2010	18	2017	14
2011	11	2018	13
2012	11	2019	6
2013	9		

合計は144件

2.2 企画内容のSDGsに基づく分類

SDGsは先進国も含めた全ての国を対象とした目標である。しかし日本がGDP（国内総生産）世界第3位の先進国であることから、日本人にとって記載されている概要説明や数値だけから、その目標が導かれた状況をイメージすることは非常に困難であり、おもしろプロジェクトの企画内容を分類することは極めて難しい。例えば、国連広報センターのホームページによる「目標1 貧困」の概要説明には「国際途上地域では今でも10人に1人が、1日1ドル90セントという国際貧困ライン未満で家族と暮らしています」とある。厚生労働省（2018）による「平成29年国民生活基礎調査の概況」には、平成28年の1世帯の平均所得は年額560.2万円と報告されている。これを1日換算にすると1.5万円（137ドル81セント、1ドル=108.84円：三菱UFJリサーチ&コンサルティングのホームページより）となり、SDGsの概要説明にある数値の70倍以上である。また山口大学の「2015年度学生生活実態調査」（山口大学、2016a）によると、大学生の1カ月の収入額合計は9～12万円未満と回答した割合が最も高く（3～4千円/日）、やはりSDGsの数値からは大きくかけ離れている。上記の例以外の16のゴールも同様で、169のターゲットを参照してもおもしろプロジェクトの企画内容を分類することは難しい。本研究では各SDGs目標番号のスローガンや目標文章、国連広報センターのホームページに記載されている概要に含まれる文言をもとにキーワードを設定し、おもしろプロジェクトの企画内容を分類することに用いた。おもしろプロジェクトは上記のように、学生の自由な発想に基づく正課外活動である。実施者が大学生であることから「大学」をテーマとするものも少なくない。山口大学は県庁所在地である山口市、すなわち都市に設置されている。よって「学内環境改善」や「学内やその周辺の調査」を「都市問題」解決に付

随するものと判断して、「目標11都市」のキーワードとした。「環境保全」は「目標13気候変動」、「目標14海洋資源」、「目標15陸上資源」の3者につながるものである。これら3つは相互作用していることから明確に区分することは極めて難しい。よって大気環境に直接的に関わるもの、例えば「温室効果ガス」は「目標13気候変動」と、海に直接的にかかわるもの、すなわち「海洋保全」や「海洋資源保全」といったものを「目標14海洋資源」と捉え、それ以外の場合を「環境保全」として扱い、「目標15陸上資源」のキーワードとすることにした。おもしろプロジェクトには県内の観光資源などを調査するものもある。調査対象は必ずしも「都市」にあるとは限らない。「県内情報の調査」はその情報共有が基本的コンセプトであると考え、「インターネット」がキーワードの一つとなっている「目標17実施手段」のキーワードとすることにした。以上をもとにしたSDGsの17の目標に対して設定したキーワード一覧を表3に示す。

2.3 企画内容に対する分類方法

これまでに発行されているおもしろプロジェクトの報告書と実施学生とのコミュニケーションの記憶をもとに対象とする各企画内容に対して表3に基づくキーワードを選択した。企画内容によっては多数のキーワードが該当していることもあったが、各企画内容に対してメインとなるキーワード1つと、サブとなるキーワード1つの計2つづつを付けることとした。

3 結果および考察

3.1 メインキーワードによる分類結果

メインキーワードおよびサブキーワードに基づく分類結果を表4に示す。メインキーワードによる分類において最も多かったのは「目標9イノベーション」で31件（21.5%）であった。ただ後述するが、おもしろプロジ

表3 SDGs（持続可能な開発目標）の17目標に対して設定したキーワードの一覧

番号	タイトル	キーワード*
1	貧困	貧困，災害による経済的損失
2	飢餓	飢餓，農林水産業，農村開発，食料生産システム，小規模農家への投資
3	保健	健康，福祉，保健，疫病，医療
4	教育	教育，生涯学習，教員不足，奨学金制度，校舎建設
5	ジェンダー	ジェンダーの平等，女性のエンパワーメント
6	水・衛生	水，トイレ，衛生，水不足，飲料水，水関連災害
7	エネルギー	エネルギー，持続可能なエネルギー，近代的なエネルギー，エネルギーへの普遍的アクセス
8	成長・雇用	働きがい，経済成長，雇用推進，インフォーマル・セクター
9	イノベーション	産業革新，技術革新，インフラ整備，情報通信技術，製造業，生産加工
10	不平等	不平等，保健格差，教育サービス格差，所得の不平等
11	都市	まちづくり，都市問題，学内環境改善，学内やその周辺の調査
12	生産・消費	資源効率，省エネ，食料廃棄物，体重超過
13	気候変動	気候変動，温室効果ガス
14	海洋資源	海の豊かさ，海洋保全，海洋資源保全，海洋環境保全
15	陸上資源	陸の豊かさ，森林管理，土地劣化阻止，生物多様性，環境保全
16	平和	平和，公正，司法，警察，個人の権利保護
17	実施手段	グローバル・パートナーシップ，地域パートナーシップ，インターネット，県内情報（観光資源など）の調査

※：キーワードには最終的におもしろプロジェクトの企画に付さなかったものも含まれる

エクトでは「ロボットコンテスト」や「ソーラーカーレース」などといった「ものづくり」コンテストへの出場を申請するもののがかなりある。こうした「ものづくり」コンテストは継続申請傾向が高く，このような結果につながった。何より「ものづくり」に興味がある学生が多い工学部の存在が大きく関係している。正課外活動は「目標9イノベーション」という形で社会貢献につながりやすいのも確かではあるが，最もつながりやすいという訳ではないだろう。次に多かったのは「目標4教育」と「目標17実施手段」で，ともに25件（17.3%）であった。教育の最高学府である大学の学生ならではの着眼であるといえる。「目標17実施手段」は，いうなれば「パート

ナーシップ」，「交流」，「連携」といったものである。大学生の目は正課外活動において「人とつながること」，「人を巻き込むこと」という「社会連携」に向かっているということを示している。次に多かったのは「目標11都市」で20件（13.9%）あった。学生にとって最も身近な対象である大学調査やその改善を「目標11都市」に分類したことがこの結果につながっていると言えるだろう。「目標3保健」も17件（11.8%）と少なくない。これは「目標9イノベーション」同様に，医学部が山口大学に設置されていることに大きく影響していると考えられる。

3.2 両キーワードの合計による分類結果

メインキーワードとサブキーワードの合計

に基づく分類において最も多かったのは「目標4教育」で83件（28.8%）であった。メインキーワードのみで分類したときは17.3%であったのに対し、サブキーワードを含めた合計にすると28.8%とはねあがる。正課外活動にて学生が発案しやすいキーワードは「教育」であり、正課外活動が社会貢献的に「教育」と最も深く関わっているということを示している。次に多いのは「目標17実施手段」の53件（18.4%）であり、「教育」同様、正課外活動が「社会連携」と深く関わっているという結果である。「目標11都市」の割合が両キーワードの合計にすると高くなり（38件、13.2%）、「目標9イノベーション」の37件（12.9%）とほぼ同じ程度になった。またメインキーワードにおいて11.8%と高い数値で

あった「目標3保健」は合計にすると5.9%とそれほど高くはなくなる。

両キーワードの合計に基づく分類において、割合が1%以下という極めて少数のものは、「目標1貧困」（0件）、「目標2飢餓」（3件、1.0%）、「目標6衛生」（3件、1.0%）、「目標13気候変動」（0件）、「目標14海洋資源」（0件）、「目標16平和」（1件、0.7%）であった。「目標13気候変動」に関しては、大気環境に直接関わるもののみとしている。大気環境の分析や調査は非常に専門性が高く、どちらかというところと研究に該当する。大気環境となるとその調査範囲、分析装置なども非常に大がかりとなり、おもしろプロジェクトの支援金の最高額である50万円では予算がまったく足りない。「目標14

表4 設定したキーワードによるおもしろプロジェクト企画の分類結果

番号	タイトル	メインキーワード		サブキーワード		両キーワード合計	
		件数 (件)	割合 (%)	件数 (件)	割合 (%)	件数 (件)	割合 (%)
1	貧困	0	—	0	—	0	—
2	飢餓	1	0.7	2	1.4	3	1.0
3	保健	17	11.8	0	—	17	5.9
4	教育	25	17.3	58	40.3	83	28.8
5	ジェンダー	4	2.8	1	0.7	5	1.7
6	水・衛生	1	0.7	2	1.4	3	1.0
7	エネルギー	1	0.7	9	6.3	10	3.5
8	成長・雇用	1	0.7	3	2.1	4	1.4
9	イノベーション	31	21.5	6	4.1	37	12.9
10	不平等	4	2.8	2	1.4	6	2.1
11	都市	20	13.9	18	12.5	38	13.2
12	生産・消費	9	6.3	2	1.4	11	3.8
13	気候変動	0	—	0	—	0	—
14	海洋資源	0	—	0	—	0	—
15	陸上資源	4	2.8	13	9.0	17	5.9
16	平和	1	0.7	0	—	1	0.4
17	実施手段	25	17.3	28	19.4	53	18.4
合計		144		144		288	

海洋資源」も同様で海洋環境の分析や調査は正課外活動の範疇を超えていると言えるだろう。また山口大学には水産学部のような海に関係する学部はなく、山口大学生の大多数が在籍している吉田キャンパスから海までも10キロメートル以上離れていることも0件となった要因であろう。先にも述べたが「目標13気候変動」、「目標14海洋資源」、「目標15陸上資源」の3つを明確に区分することは難しく、本研究ではおよそすべての「環境保全」は「目標15陸上資源」と分類している。「目標15陸上資源」は、17件（5.9%）であり、学生は「環境保全」に興味や関心がないという訳ではないだろう。「目標1 貧困」、「目標2 飢餓」、「目標6 衛生」、「目標16 平和」が皆無ないし極めて低いのは平和な先進国であるという日本の現在の状況が大きく影響していると思われる。先にも触れたが、SDGsの概要に示されるような貧困状態は、およそほとんどの日本人には現実味のない状況である。また飢餓状態、衛生環境についても同様である。データ数3件の「目標2 飢餓」として分類した企画のキーワードは「農林水産業」、「農村開発」である。またデータ数3件の「目標6 衛生」に関しては、学内の野良猫に関わる「衛生」と「水関連災害」がキーワードである。どちらも本研究の特有な分類方法として計上されたものであって、人によっては別に分類されるかもしれない企画である。データ数1件の「目標16 平和」は、子どもへの暴力防止を考えるプロジェクトであり、これはSDGsの概要にも示される事項ではある。しかし対象とした期間で1件しかなかった。以上から「目標1 貧困」、「目標2 飢餓」、「目標6 衛生」、「目標16 平和」の4つは学生の正課外活動としてほとんど着目されない社会貢献だと言えるだろう。

「目標5 ジェンダー」、「目標7 エネルギー」、「目標8 成長・雇用」、「目標10 不平等」、「目標12 生産・消費」の5つも5%以

下であり、低い傾向にあった。「目標5 ジェンダー」、「目標8 成長・雇用」、「目標10 不平等」の3つに関しても正課外活動としてほとんど着目されない社会貢献であると思われる。しかし「目標7 エネルギー」に関しては、サブキーワードによる分類として9件、「目標12 生産・消費」はメインキーワードとして9件があがっている。「目標7 エネルギー」として分類された企画のキーワードは「持続可能なエネルギー」と「近代的なエネルギー」であり、「目標12 生産・消費」に関しては「省エネ」であった。これら3つのキーワードはいずれも「環境保全」に関わるものである。本研究におけるSDGsの目標としての分類では、「目標7 エネルギー」や「目標12 生産・消費」は低い傾向になるが、先に示した「目標15 陸上資源」の結果と合わせて考えると、正課外活動は「環境保全」という形では十分に社会貢献につながると考えて良いだろう。

3.3 「目標3 保健」と「目標9 イノベーション」に関する詳細分析

「目標3 保健」と分類されたメインキーワード17件の内訳は、「医療」が15件、「福祉」が2件であった。「医療」をメインキーワードとした企画の代表者は15件とも医学部の学生であった。医学部の学生は正課外活動においても、所属する学部の特徴である「医療」に着目する傾向にあると言える。

「目標9 イノベーション」と分類されたメインキーワード31件の内訳は、「技術革新」が28件、「情報通信技術」が3件であった。またサブキーワード6件の内訳は、「技術革新」が4件、「情報通信技術」が2件であった。「技術革新」がキーワードとなる企画32件のうち25件が「ものづくり」コンテストへの出場を目指すものであり、25件ともその企画の代表者は工学部およびその大学院生であった。一般に「ものづくり」、すなわち「技術革新」だけでは発想や実行はそれほど安易

なものではない。しかしコンテストに関わるレギュレーションがあれば「技術革新」のポイントが絞られるため、着想、実行は格段にやすくなる。本研究による分類結果は、こうした「ものづくり」に対して非常に興味を持っている工学部の学生の存在と、「ものづくり」コンテストへの出場という着手のやすさが強く反映されていると考えられる。

以上より「目標3 保健」や「目標9 イノベーション」と分類された企画は、その特徴を持つ学部によるものである傾向が非常に強いということがわかる。すなわち正課外活動による社会貢献は、その学生が所属する学部の傾向が強く表れる傾向にあるということが言えるだろう。

3.4 「目標4 教育」に関する詳細分析

先に述べたように「目標4 教育」と分類された企画は、メインキーワードで25件、サブキーワードで58件と最も多い傾向にあった。

「目標4 教育」に対するキーワードとして表3に掲げるようにいくつかを設定したが、すべての企画が「教育」というキーワードに該当した。「教育」に関しては、自分達が講義以外にさらに何かを学びたい、というものと、自分達の学んだことを誰かに提供したい、という2種類が考えられる。すなわち教育（知識や技術など）の提供先として、自分達（企画の構成員）、自分達以外（構成員以外）、その両者の3パターンで分類することができる。教育の提供先が企画の構成員であったものは83件中44件（53.0%）、構成員以外であったものは14件（16.9%）、両者であったものは25件（30.1%）という結果となった。およそ半数は、正課外活動を通して自分達自身が何かを学びたいという傾向にある。一方で半数は、教育を提供したいという傾向にある。後者は社会貢献的にみると、教育をすぐに提供することから「1次的」と言うことができ、前者は構成員の知識が増し、いずれ社会へと還元されることから「2次的」と言って良い

だろう。正課外活動における「目標4 教育」には1次的な社会貢献のものと、2次的なものがあり、本研究の対象とする正課外活動ではその割合は1対1となった。

3.5 「目標11都市」に関する詳細分析

「目標11都市」と分類されたメインとサブの両キーワード合計38件の内訳は、「まちづくり」が7件（18.4%）、「学内やその周辺の調査」が8件（21.1%）、「学内環境改善」が23件（60.5%）であった。この結果よりわかるように「学内環境改善」が最も多く、また「学内やその周辺の調査」を加えた「大学」をテーマとしたものに関しては31件（81.6%）ということになる。正課外活動として学生は「大学づくり」を着想しやすい、すなわち正課外活動では学生は身近なものに着眼、着手する傾向にあると言えるだろう。本研究では山口大学が都市にあることから「大学」をテーマとしたものを「目標11都市」に分類することにした。およそほとんどの日本の大学は都市にあることから、どこの大学生であっても類似した傾向になることが予想される。しかし仮に大学が辺境地にある場合には、例えば「農村開発」がキーワードとなって「目標2 飢餓」に分類されるかもしれない。ただし「学内環境改善」や「学内やその周辺の調査」での経験はいずれ「まちづくり」として活かされることになるかもしれない。よって、正課外活動は「目標11都市」という分類で社会貢献の役割を果たす傾向にはあるが、直接的な「まちづくり」につながる活動とは限らない。むしろ「身近な生活環境づくり」という形で社会貢献につながると言ったほうが適切であるかもしれない。

3.6 「目標17実施手段」に関する詳細分析

「目標17実施手段」と分類されたメインとサブの両キーワード合計53件の内訳は、「グローバル・パートナーシップ」が17件（32.1%）、「地域パートナーシップ」が29件（54.7%）、「インターネット」が2件

(3.8%)、「県内情報の調査」が5件(9.4%)であった。最も多かったのは「地域パートナーシップ」で、このキーワードを付した企画はすべて「地域交流」に関係したものであった。「グローバル・パートナーシップ」も多く、「留学生交流」や「国際交流」を企画の内容としたものがあった。このように地域交流や国際交流を目的とする正課外活動は非常に多い。すなわち正課外活動は「社会連携」という形で社会貢献をもたらし、身近な地域だけでなく、国際的視点も含めた社会連携もかなり期待できると言えるだろう。

4 まとめ

山口大学の正課外活動の一つであるおもしろプロジェクト、2007から2018年度に採択された144件の企画に対して、1つの企画に対して2つずつSDGsの17目標に設定したキーワードを付して、その分類を行った。

最も多かったのは「目標4教育」となり、正課外活動は「教育」という形で社会貢献を最も果たす傾向にあることがわかった。ただし、「教育」には「すぐに教育を社会に提供する」場合と、「活動者の知識と経験となって、いずれ社会に還元される」場合の2者があった。次に多かったのは「目標17実施手段」であった。これに分類された企画は、そのほとんどが「地域交流」、「留学生交流」、「国際交流」に関するものであり、正課外活動は「社会連携」という形で社会貢献をもたらし、身近な地域だけでなく、国際的視点も含めた社会連携もかなり期待できると言えることがわかった。「目標11都市」と分類された企画も少なくなかった。ただし社会貢献的視点において直接的な「まちづくり」を企画とするものよりも「大学」をテーマとした企画のほうが多く、正課外活動は「まちづくり」につながるというより、「身近な生活環境作り」につながるという表現のほうが適切であるように思われる。「目標3保健」や「目標

9イノベーション」と分類された企画も少なくなかった。これは工学部や医学部の存在による影響が大きく、正課外活動とは言え学生は自身の専門(正課)につながるものを着想、実施する傾向にあるようである。SDGsの分類としては完全な分類はできなかったが、「環境保全」という形で正課外活動は社会貢献することも示唆された。一方で、分類上少なかったのは、「目標1貧困」、「目標2飢餓」、「目標5ジェンダー」、「目標6衛生」、「目標8成長・雇用」、「目標10不平等」、「目標16平和」であった。

正課外活動は社会貢献に十分つながるものであると言える。ただし学生の自由な発想のもとで行う正課外活動では、社会貢献の分類として偏りが生じると考えられる。仮に全般的な社会貢献を目的とした正課外活動を大学が期待するのならば、すなわち例えばSDGsの17目標をもれなく網羅するような正課外活動を期待するのであれば、大学は正課などを通じて学生が着想しにくいSDGsの目標や社会課題に対する情報提供を行うなど、ある程度教員によって活動内容を誘導する必要が生じるであろう。

(学生支援センター 講師)

【参考文献】

- (1) 外務省, 2019, 『「持続可能な開発目標」(SDGs)について』.
- (2) 外務省, 「JAPAN SDGs Action Platform」, <https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/index.html> (2019/12/16最終アクセス).
- (3) 国連広報センター, 「SDGs(エス・ディー・ジーズ)とは? 17の目標ごとの説明、事実と数字」, https://www.unic.or.jp/news_press/fea

- tures_backgrounders/31737/
(2019/12/16最終アクセス) .
- (4) 厚生労働省, 2018, 『平成 29 年国民生活基礎調査の概況』 .
- (5) 三菱UFJリサーチ&コンサルティング, 「外国為替相場／前年の年末・年間平均 2016」, <http://www.murc-kawasesouba.jp/fx/yearend/index.php?id=2016> (2019/12/16最終アクセス) .
- (6) 溝上慎一, 2009, 「『大学生活の過ごし方』から見た学生の学びと成長の検討」『京都大学高等教育研究』 15, 107-118 .
- (7) 文部科学省 (大学教育の検討に関する作業部会学生支援検討ワーキンググループ第 4 回), 2009, 『学生支援の在り方に関する論点整理 (案)』 .
- (8) 文部科学省 (中央教育審議会), 2018a, 『人口減少時代の新しい地域づくりにむけた社会教育の振興方策について』 .
- (9) 文部科学省, 2018b, 『高等学校学習指導要領 (平成30年告知) 解説「特別活動編」』 .
- (10) 辻多聞, 2009, 「おもしろプロジェクトによる学びの成果と今後の課題」『大学教育』 6, 61-72 .
- (11) 辻多聞, 2012, 「PBLによる大学生の成長とそれに伴う大学教育の在り方～山口大学と同志社大学でのアンケート結果をもとに～」『大学教育』 7, 16-25 .
- (12) 辻多聞, 2019, 「大学生および大学における正課外活動の位置付け」『大学教育』 16, 17-24 .
- (13) 山口大学, 2008, 『山口大学おもしろプロジェクト 07 報告書』 .
- (14) 山口大学, 2009, 『山口大学おもしろプロジェクト 08 報告書』 .
- (15) 山口大学, 2010, 『山口大学おもしろプロジェクト 09 報告書』 .
- (16) 山口大学, 2011, 『山口大学おもしろプロジェクト 10 報告書』 .
- (17) 山口大学, 2012, 『山口大学おもしろプロジェクト 11 報告書』 .
- (18) 山口大学, 2013, 『山口大学おもしろプロジェクト 12 報告書』 .
- (19) 山口大学, 2014, 『山口大学おもしろプロジェクト 13 報告書』 .
- (20) 山口大学, 2015, 『山口大学おもしろプロジェクト 14 報告書』 .
- (21) 山口大学 (第 17 回学生生活実態調査委員会), 2016a, 『2015 年度学生生活実態調査』 .
- (22) 山口大学, 2016b, 『山口大学おもしろプロジェクト 15 報告書』 .
- (23) 山口大学, 2017, 『山口大学おもしろプロジェクト 16 報告書』 .
- (24) 山口大学, 2018, 『山口大学おもしろプロジェクト 17 報告書』 .